

「幸せに役立つ服」表現

芦田淳さん 女性に愛され半世紀

20日に死去したファッションデザイナーの芦田淳さんは、半世紀以上にわたって、日本のファッション界で第一線に立ち続けてきた。〈本文記事1面〉

「夜中に目が覚めてアイディアを思い付き、デザインを描いた紙を握りしめて朝出勤することもある」と話し、晩年も情熱的に服作りに取り組んでいた。

8人きょうだいの末っ

子。長兄一家が赴任先の米国から持ち帰った雑誌や美しい服の影響で、ファッションに興味を持った。高校生の頃、憧れだった画家、中原淳一さんの元に、デザイン画を携えて押しかけ、後に弟子となった。1953年に、アパレル会社に就職、デザイナーになった。「生活の中で服がどう生き、その人の幸せに役立つかという視点で服作りをし

ている」との言葉通り、手掛けた服に派手さや奇抜さはないが、時を経ても変わらない美しさがあった。服は、皇族や首相夫人、各国大使夫人、女優など多くの女性に愛され、顧客たちは、

「どんな場面でも安心して着ることができると信頼を寄せた。

近年、公の場に姿を見せる機会は減ったが、2014年12月には、東京都内で60年以上に及ぶ創作活動を振り返る展覧会を開き、新作も発表していた。服でエレガンスを表現し、女性たちを美しくしたい。そんな信念を通じた人生だった。

国内外の服飾史に詳しいエッセイストの中野香織さんは「戦後の日本にプレタ

ポルテ（高級既製服）の概念を持ち込んだ草分け的存在。常に時代の感覚を反映しながら、決してエレガンスと品格を失わなかった。

芦田さんの服を着れば、国際的にどんな舞台にたっても日本の品格を表現できた」と振り返った。

親交のあった女優の佐久間良子さんは、「30代から映画やテレビの衣装のほか、プライベートでも、先生の洋服をたくさん着させていただいた。仕事ぶりに

お人柄がにじんで、仕立てが実に丁寧で細やか。センスの良さが感じられ、何度着ても着崩れしない抜群の洋服だった。食事にもよく誘っていたとき、穏やかなお話しぶりが忘れられない。惜しい人を亡くし、残念でならない」と話した。

自宅に弔問に訪れた俳優の西岡徳馬さんは「お世話になった感謝を伝えた。一時代を築いて、素晴らしい一生だったと思う」と悼んだ。



ファッションショーの準備をする芦田淳さん（1977年）